

雑詩

王

維

客 故郷より来る

応に故郷の事を知るべし

来る日 綺窓の前

寒梅花を著けしや未だしや

【作者】王維(七〇一?〜七六一年)・盛唐の詩人。字は摩詰。太原祁県(現・山西省祁県東南)の人。進士となり、右拾遺・尚書右丞等を歴任。晩年は仏教に傾倒した。同時代の詩人李白が“詩仙”、杜甫が“詩聖”と呼ばれるのに対し、その典雅静謐な詩風から詩仏と呼ばれ、南朝より続く自然詩を大成させた。韋応物、孟浩然、柳宗元と並び、唐の時代を象徴する自然詩人である。とりわけ、王維は中でも際だった存在である。画についても、“南画の祖”と仰がれている。

【語釈】\*雑詩…興の趨(おもむ)くままに作った、型にとらわれない詩。 \*故郷…ふるさと。ここでは、王維の妻などの家族がいる。

\*應知…きつと知っていることだろう。 來日…ここへやってくる時。 \*綺窓…美しい飾りのある窓。 \*寒梅…早咲きの梅。

【通釈】あなたは、わたしの郷里からやってきましたので、きつと故郷の出来事を知っていることだろう。 \*早咲きの梅は、花をつけたただらうか。 \*ここへやってくる時には、美しい飾りのある妻の部屋の窓の前にある。